

## 開会全体会

### 記念講座「ろう重複教育の歴史と親の組織化」

\*進行 たましろの郷施設長 花田 克彦

\*パネラー

社会福祉法人東京聴覚障害者福祉事業協会

理事長 南宮 由和

東京ろう重複者とあゆむ会

会長 間崎江美子

たましろの郷家族会

会長 遠藤 孝子

社会福祉法人東京聴覚障害者福祉事業協会

理事 杉山 行利

### 【自己紹介】

花田：入門講座も含めて「ろう重複、それぞれの地域でのくらしと高齢の問題をテーマにしたパネルディスカッションの形で進めさせていただく。まずはそれぞれのパネラーご自身から自己紹介を。

南宮：社会福祉法人東京聴覚障害者福祉事業協会の理事長をしている。理事長になる前に大田区の知的障害者の授産施設の施設長を 5 年間していた。江東ろう学校のころから色々な運動に関わってきた。

間崎：「東京ろう重複者とあゆむ会」の間崎です。子供はたましろの郷に入所している。今日はなかまの集いに参加している。これまでの先輩の親達の運動が今の私達の運動につながっている。

遠藤：たましろの郷家族部会の遠藤です。

杉山：この法人の理事杉山です。ろう学校の親の支援という立場からの話になってしまうかもしれませんが、よろしくお願いします。

### 【ろう重複児教育の歴史】

花田：最初に南宮さんから日本のろう教育の歴史、東京のろう重複障害者の歴史、なぜ東京にろう重複の子供達が入ったのかなど経過を話していただく。また現在全国のろう学校という名称から聴覚特別支援学校という名称に変わった。その中でなぜ東京だけはろう学校という名称が残っているのか。そのことも含めて話していただきたい。ろう学校長の経験も含めてお話しいただきたい。

南宮：ろう学校の歴史はこの集会で一番大切。日本の盲ろう教育は、一般の義務教育化とほとんど時期は変わらない。昭和 23 年以降学年進行により昭和 31 年に小学部、中学部が義務化された。だが障害の重い聴覚障害者、視覚障害者は就学免除、就学猶予の制度を勧められていた。本来その制度はその家族が使えるものだ。ろう学校があれば入れたいと思うのは家族としては当然。だが未就学の児童生徒が多かったのは、就学猶予、免除の制度が公の立場から勧められたからだ一般的な

に考えられる。その制度は親の願いや子供の願いを無視した制度だったということ。

昭和 23 年就学制度が出来る前はどうかだったのか。障害の重いお子さんも実際には盲学校、ろう学校に入学している。制度がありながらそれを使わないのは、むしろ親が受け入れていた動きが若干あったからではないか。京都市ろう学校の校長だった伊東雋祐先生（全通研の委員長も数年担当された）が昭和 27 年に能力別編成による重複学級を担当した。そのことは「京都盲ろう教育 100 周年」という本に書かれている。昭和 42 年になぜ重複学級という名称になったかなども書かれている。

それは知的障害、肢体不自由など色々な障害が重なる子など。まず何よりも私が昭和 39 年に教員になった後も口話不振児、読話不振児というレッテルが貼られていた児童、生徒がいた。なかなか発語が出来ない。読話が出来ない子がいる。重複障害という概念だけではなく、口話不振という形で就学出来なかった、就学免除を出された子供がいた。

私が江東ろう学校に赴任して 1、2 年後、小学部に入学予定だったが就学猶予免除ではじかれてしまった子供が 4 人いた。あるお母さんから「自殺を考えている」という話を聞いた。これはどうにかしなければと思い、話を聞きに行った。そこで出来たのが「香取教室」だった。その教室は土曜の午後、日曜、休日に就学出来ない子供達を集めて開かれた。

55 年程前のことで、お母さん達と一緒に江東ろう学校の教員が運営にあたり、そこで教員と親との絆が生まれた。未就学の子供を無くすための運動には大変重要だった。親御さんのニーズをきちんと受け止めて仕事にあたっていている教員がしっかり手を結んで運動を展開していくことが一番よかった。

昭和 42 年、江東ろう学校の小学部にろう重複学級が出来た。正式に学級が設置された。職員会議で大変だった。「あんた達は日本の口話教育をこわすのか」と言われた。口話教育は幼稚部から中学部まで。中学部は楽しそうに手話を使っていた。授業も手話を使っていた。

もう一つ東京の動きがあり、昭和 41 年ころから美濃部都政は 3 期 12 年続いた中で福祉重視、都民の声を聞く姿勢があった。また運動では東京の教職員組合を中心に都民集会を年に 1 回開催していた。広く都民の声を聞き、それを政策に活かすという集会だった。

そして昭和 49 年に希望者全員就学という制度を国の 4 年前に行った。（国の養護学校義務化は 4 年後）障害のある子どもが義務教育を受けるようになってからまだ 30 数年しか経っていない。それだけ多くの障害者は教育権を保障されていなかった。これ以後、子供達が主体的に学び伸びる教育を保障すること、学習権を保障することが課題になった。本当に自分の力で成長していく環境を作る

ことが必要になる。

花田：都民集会にろう団体が参加したのは昭和 42 年。その時に「もっと重複問題に対してろう団体に協力してほしい」との意見があった。当時のろう団体は「重複」（ちょうふく）という言葉も知らず「重複」（じゅうふく）だと思っていた。その頃ろう学校は優先的に重複問題を進めていた。ろう学校に重複学級が出来た。学校単位の親の会も出来た。その経緯についてお話しを。

### 【ろう重複者家族、親の活動の歴史】

間崎：親の会の間崎です。陳情に行ったりした。東京にはろう学校が 9 校あり、それぞれの学校に重複学級と親の会があった。卒業後のことや副担任制にしてほしいなど陳情に行くには、やはりまとまっていった方がよいのではないかと先生からの助言により「ろう重複児者を持つ親の会」昭和 47 年に出来た。陳情、学習会、また卒業後の場所をもとめて資金作りも始めた。チューリップの球根販売、下着の販売、バザーの時や先生方に売る行商のようなこともした。それで親達の関係も強い関係となった。

花田：9つのろう学校の親がどのようにして結び付いたのか話して欲しい。

間崎：重複担任会というものがあり、その先生方の協力、合同遠足、合同運動会などで知り合い、一緒に活動していた。毎月の例会での情報交換などしていた。

花田：9つのろう学校の親達が一緒に行動する機会があったということですが、親の会が頑張って資金作りをして貯めたお金を使ったのは立川ろう学校の親の会だと聞いていますが。立川ろう学校の親がどのように運動をして施設に結びついていったのかということをお話しいただきたい。

遠藤：立川ろう学校の重複クラスが当時「すぎなクラス」と呼ばれていた。都内のろう重複者はろう学校卒業後それぞれが地域の作業所などに分かれて通っていた。何か実行しなければ作業所は増えない。重複学級の先生から学んだり勉強会を開いたりしていた。大阪の作業所の話、いこいの村栗の木寮の話聞きながら、小学部の親で「すぎな会」を立ち上げた。それは親の会の中の立川支部という形で活動していた。親と子だけで集まっていたら世界が狭くなる。重複学級の先生がきちんとした会を立ち上げた方がよいとアドバイスしてくださり「東京ろう重複児者とあゆむ会」が出来た。

花田：親の会が出来たこと。立川では親の自主学習会を開いていたこと。実はすべて教師の指導、支援があったおかげだと思う。親と一緒に支援、運動を盛り上げてきたと思う。そのことについて当時実際に重複クラスの担任だった杉山先生お願いします。

杉山：教員から協力体制をもらったというような言い方をされたが、そんなに簡単では

ない。私はろう学校だけで30年間重複のクラスを受け持っていた。それはとても幸せなことだと思う。口話というのは口の動きをみて、声を出す。だがそれに向かない子供もいる。教え方の上手な先生から教われれば口話も上達する。逆に教え方が下手な先生から教わると上達しないと言われていた。だから積極的に重複クラスの担任になりたがる教員はいなかった。だからと言って「じゃあ希望者がいないなら仕方ないからやりましょう」という言い方では生徒に対して失礼だと思う。努力をして変えてきた。中心になってきたのはPTA会長や重複で学級の教員。子供が何か物を壊してしまったような時、障害による行動だが親が代わりに謝っていた。このように重複学級に通っている子の親が厳しい立場にあった。重複学級が核になるろう学校は素晴らしい。というのはろう重複の教育はろう教育の基本だからだ。

今は手話を一般的に使えるが、私がろう学校に入った時に手話は認められていなかった。もちろん中学部、高等部の生徒達は生活の中では使っていたが、授業では使えなかった。手が動いただけでだめだといわれた。女子は赤いリップを付けるように、男性の教師はひげを剃れといわれた。重複学級は口話だけでは難しい。教育は教師の教育方法に合わせるものではない。子供達の状況に合わせる。重複の生徒でも理解出来るようにするのが当たり前。

重複学級では身振り、手振りを使っていた。立川ろう学校で創立記念式典があった。その時にひとつ大きな問題があった。外部からお客さんが来るのに挨拶が口話だけでは難しい。手話通訳が必要ということになった。手話通訳が必要という要望が出たが意見が分かれた。夜遅くまで職員会議をした。今は職員会議はやらない。管理職だけで決めてしまう。その会議で何とか挨拶だけは認めるということになった。その時から重複を困む状況が変わってきた。手話と重複の問題は近い。理解者をもっともっと増やしてろう学校を変えていかなければならない。

今の特別支援教育はおかしい。40～50年前の状況に戻りつつある。かつて学校は親の活動に協力してきたが続かなければ意味がない。皆さんが地域に帰ってからも協力者を広めてください。今年もこの集会は参加者が多い。若い人も多く素晴らしい。是非みんなで広げて頑張っていこう。

#### 【親の会の運動から施設設立運動へ】

花田：ろう重複児のすぎな学級の活動が「めざす会」(注1)に変わったのは。施設運営にどう影響していったのか。

遠藤：すぎな会からめざす会に変わった結果、学童クラブ「クラブかたつむり」が出来た。ボランティアさんも加わり楽しい活動になった。親は親、なかまはなかまでゲームなどを楽しむことが出来るようになったことは大きな成果。夏の冒険学校、お楽しみ会、クリスマス会があった。杉並ろう学校、立川ろう学校、大塚ろう学

校などを借りて行っていた。学校が許可してくれたことはとてもありがたかった。先生方の協力で恵まれた環境だった。そのような中でクラブかたつむりの活動は進んでいった。ボランティアさんが会社帰りに来て夜遅くまで色々と話し合ってくれた。

また、卒業後の問題として作業所を作りたいということになり、立川ろう学校の生徒 1 人を受け入れて国分寺で始めたのがスタート。場所を借りるためのお金 500 万円を親の会から出した。埼玉のふれあいの里どんぐりや東京にも作業所が出来た。関東のつどいやふれあいの里どんぐり設立などの運動が広がった。色々な会の立ち上げも可能になった。

### 【寄宿舍の意義】

花田：現在都立のろう学校に寄宿舍はない。以前はろう学校の近くに住んでいてもでも寄宿舍の経験をさせた。そのことについて話してほしい。

南宮：以前は立川ろう学校、足立ろう学校に寄宿舍があった。最初は通学が困難な子供のためにあった。生徒が自立出来、2~3 人の部屋で学年を越えて交流できて良い経験になる。通学前の 1 時間本を読んだりした。貴重な宿舎がなくなった理由は利用者が減ったから。寄宿舍の廃止と合わせてろう学校も再編整理された。江東ろう学校、品川ろう学校、大田ろう学校、杉並ろう学校もなくなった。大きな流れを東京都の教育委員会は計算していたのではないか。残念なのはろう学校の宝が一つ消えたこと。

杉山：寄宿舍に入る理由は、家が遠くて通えないことや、片親で送迎が難しいなど。寄宿舍は学校の延長。ほっとすることできない。いつも管理されている。常に見られている。今の子供達は自由を求めるので、管理されることを嫌い希望者は減った。自立という目的も長くは続かない。

だが利用者が一人でも続けるべき。寄宿舍がないと通えない子がいる。通いたくても通えないと他の障害の学校に通わざるを得ない。教育権の問題。寄宿舍までの往復は貴重な経験になる。先生も一緒に泊まることで子供達への理解が深まる。そのような意味で大事な場所だが、それをなくすというのは教育の面でも大きな損害だ。

南宮：寄宿舍教育という言葉がある。通学困難、家庭の事情、遠いからという理由だけではない。色々な意味で宿舎教育の役割は大きい。なくなって残念。諸外国ではエリート教育に寄宿舍が使われている。

花田：寄宿舍によってどのように子どもが変わったか。

間崎：最初は入るかどうかわかった。明日から寄宿舍に入ると思うとご飯も食べられず落ち込んだ。曜日のことを理解したのは寄宿舍で生活するようになってから。土曜日には自分の家に帰れるので。洗濯物も同じ部屋の人に怒られたりして色々な経

験をすることが出来た。成長した。話そうとする姿勢が身に付いた。本人は最初半年くらい辛そうだったが、曜日を理解してからは落ち着いた。

### 【質疑応答】

司会：参加者の方から質問を受けたい。

参加者：言語聴覚士です。私はあと1年半で70歳。ろう学校の重複学級のお子さんの相談、支援をしていた。現在は病院でろう重複のお子さんの相談支援をしている。ろう学校重複学級の先生と病院は連携が取れていた。だが今は3年くらいで先生が変わってしまう。本来重複の子供の教育は長い経験が必要。ろう重複のお子さんへの理解が広まっていない。学校の現場での理解が足りないように感じる。学校の現場での対応について聞きたい。

南宮：その通りだと思う。ろう学校の異動が激しい。初任は4年で異動。8年で強制異動。実績を積んでも異動になり継続出来ない。それを克服しなくてはならない。重複担任会があるので、そこできちんと引継ぎをするなど検討が必要。後々の発達を保障する体制を作る努力が必要。

初めてろう重複学級が出来た時を思い出す。太鼓をたたくなど伝統的なろう教育、遊びながら学んでいた。重複の子供の指導はコミュニケーションが重要だが、その概念が狭い。人間の一拳手一投足がコミュニケーションだ。コミュニケーション、言語は一元的ではだめ。表情や身振りも大切。東京のろう重複の歴史は、学校にくることや教育権を保障した。だが学習権は保障していない。その歴史を踏まえながら考える。まず子供から笑顔を引き出すことを大切にした。それは肢体不自由教育の方法でもある。指差し、実物を見せて教えることが手話に繋がった。言語の概念を広げること、子供の発達をきちんと見ることが大切。

杉山：私はろう学校に19年務めた。もっと長い先生もいた。一番困るのは子供。もう少し長い期間異動しないでほしい、変わったら指導のレベルを下げないでほしいなど要望を出してほしい。子供を守るのは親。親同士が話し合い集団で言うべきだ。親は権利を持った立場でいてほしい。もっと長く異動しないように教育委員会に訴えていくことも大切。

参加者：42歳のろう重複の息子がいる。子育てで一番感じたのは親が言語として手話を獲得して子供に教えてこなかったこと。反省している。今日の話聞いて感じた。親が手話を学ぶための機会は必要。親が学ぶ場所があれば教えてほしい。

花田：最近の若いお母さん方は手話で会話をしているが、60代以上のお母さん方は手話を使わないという違いは何なのか。正しい手話とは何なのか。国が決めた手話が正しいのか。私はなかま同士で伝わる手話が一番正しい手話だと思う。難しい問題だ。最後にお母さん達から感想を。

間崎：今日はここに立つだけで緊張して伝えたいことが全ては伝えきれなかった。先輩

方の積み重ねが今の私達に繋がっている。あゆむ会と親の会とめざす会と一緒に  
なってあゆむ会になった。色々な課題はあるが、この機会に地域や在校生のお母  
さん方ともっと一緒に活動を広めたいと思う。

遠藤：言いたいことの一部しか話せなかった。我が子の成長を考えると、ろう学校に入  
学して子供に言葉があると分かった時が親として変わった瞬間だった。息子は  
44 歳。重複のなかまの中で育ってきて思うのは、家族として我が子の全てを受  
けとめることが大切。親としてそこから出発する。子どもが思うように育って  
くれないと不安になるのではなく、親が変わらないと子供は変わらない。花田：大  
切な問題がいくつか出た。ろう学校の教員の任期が短か過ぎることや寄宿舍の問  
題など。また入門講座で質問等があれば出してほしい。

(注1) めざす会＝東京聴覚障害者の生涯保障をめざす会